

総 説

心不全患者のセルフモニタリングに関する文献レビュー

——健康管理に関する諸概念との比較——

服 部 容 子

Literature Review on Self-monitoring by Heart Failure Patients

——Comparison of Several Concepts Related to Healthcare Management——

HATTORI Yoko

Abstract : In order for heart failure patients to be sufficiently able to practice their own healthcare management during recuperation, it is necessary for self-monitoring to be improved. Thus, in this study of self-monitoring for heart failure patients, an investigation of the literature was carried out using PubMed, CINAHL, ProQuest and Japana Centra Revuo Medicina, to clarify if anything regarding the self-monitoring required for heart failure patients can be identified, and to study the differences between similar concepts related to healthcare management. The results suggested that self-monitoring by heart failure patients allows them to self-observe the condition of their heart failure and grasp the actuality of its progression, in order to detect the signs of worsening heart failure early and sustain their physical condition and treatment adequately. Moreover, self-monitoring is one element in self-management and self-care, and it is suggested that this is also an entryway to healthcare management for providing the patient the life they wish for and improving QOL.

Key Words : Self-monitoring, Heart failure, Literature review

抄録：心不全患者が療養生活における自らの健康管理を適切に実践できるようになるためには、セルフモニタリングを充実させる必要があると考えられる。そこで本研究は、心不全患者のセルフモニタリングについて、PubMed, CINAHL, ProQuest, 医学中央雑誌を用いた文献検討を行い、心不全患者に求められるセルフモニタリングとは何を指すのかを明らかにするとともに、健康管理に関して類似する諸概念との違いを検討した。その結果、心不全患者のセルフモニタリングは、心不全増悪の兆候を早期発見したり、体調管理や治療を適切に継続するために、自ら心不全の状態を観察し、生じていることを把握することであることが示唆された。また、セルフモニタリングは、セルフマネジメントおよびセルフケアの一要素であり、QOLを改善し、その人らしい生活を患者にもたらす健康管理の入り口として存在していることが示唆された。

キーワード：セルフモニタリング, 心不全, 文献レビュー

I. はじめに

心不全はあらゆる心臓疾患の終末段階であり、現在増加の一途にある。心疾患は日本人の死因第2位で、

そのうち、心不全による死亡数は2000年に急性心筋梗塞を上回り、心疾患の死因の中で最も多いと報告されている¹⁾。その背景には、人口の高齢化、食事の欧米化、運動不足といった現代の生活スタイルがあり、誰もが心臓病を患うリスクを抱えていることがある。

また、心臓病に伴う生命の危機的状況の多くが、医療技術の進歩により克服されるようになり、慢性的状況に移行する患者が増加傾向になっていることがある²⁾。

心不全を患った患者は、低下した心臓の運動耐容能に応じ、心負荷をかけない生活動作や身体活動を療養生活において維持する必要がある。そのため、心不全患者は持続的な健康管理を自ら実践するよう求められる。健康管理に関連する著名な概念としては、セルフケア、セルフマネージメント、アドヒアランスなど、複数存在する。そして、近年広まりつつある概念に「セルフモニタリング」がある。セルフモニタリングは、患者自身が自己の行動や態度、感情、思考などを観察したり記録したりすることによって、それらに対する具体的で客観的な気づきをもたらすこととされ³⁾、認知行動療法を実践する臨床心理学を中心に用いられてきた用語である。その後、看護において捉えるべきセルフモニタリングの概念分析が Wilde と Garvin⁴⁾により行われ、「自らの健康や病気を適切に管理するために、病気の症状や身体感覚を定期的に測定したり、記録したり、観察して認識すること」と、2007年に定義された。しかしながら、この定義は様々な疾患に当てはまるものであり、心不全患者に求められるセルフモニタリングにおいて、何を観察したり認識したりすべきなのかまでは明らかにされていない。

近年、入退院を繰り返す慢性心不全患者が増加しており⁵⁾、セルフモニタリングは心不全患者が病状増悪を予防しながら、自らの生活を維持するために身につけるべき健康管理能力の一つとなっている。そのセルフモニタリングの能力を充実させるためには、看護師がその概念について共通認識を持ち、療養生活支援に臨む必要があると考えられる。そこで、本研究は心不全患者のセルフモニタリングの文献レビューを行い、心不全患者に求められるセルフモニタリングとは何を指すのかを明らかにするとともに、セルフモニタリングと類似する健康管理に関する諸概念との違いを検討することを目的とした。

II. 方 法

1. データ収集の方法

“看護 (Nursing)”, “セルフモニタリング (Self-monitoring)”, “心不全 (heart failure)” をキーワードに、PubMed, CINAHL, ProQuest, 医学中央雑誌を活用し、文献検索を行った。セルフモニタリングという用語が慢性の病気に対して使われるようになったのは

最近である、という Wilde ら⁶⁾の指摘から、データベースの検索範囲は2000年1月から2009年1月の過去10年間分とし、2009年1月に検索した。

2. 分析方法

対象文献から、心不全患者のセルフモニタリングに関する記述をデータとして識別し、抽出した。また、各々の文献における記述の背景を明らかにするため、研究目的、対象、研究方法を抽出し、分類整理した。

III. 結 果

文献検索の結果、PubMed 10件、CINAHL 20件、ProQuest 17件、医学中央雑誌 12件が該当した。入手可能な文献から、重複および本文中にセルフモニタリングの用語が使用されていないものを除いた結果、文献は31件となった。そのうち、心不全患者のセルフモニタリングとは何を指すのかを具体的に記述した文献は12件であった。そのため、12件を文献レビューの対象とした。その内訳は、2件が総説、3件が介入研究、7件が調査研究であった。

1. 心不全患者のセルフモニタリングに関する文献の概要 (表1)

2件の総説は、疾病の増悪を防ぐためにはセルフモニタリングが重要であるという観点に立ち、その必要性を論じていた。仲村⁷⁾は、セルフモニタリングの目的およびそのポイントに言及し、患者がセルフモニタリングを実践した場合の効果を示していた。また、池亀⁸⁾は、増悪予防に必要な患者指導の一部として、セルフモニタリングを取り入れることの有効性を述べていた。介入研究では、セルフモニタリングに関する指導の効果を再入院率や QOL の変化から検証したり⁹⁾、指導の効果から介入方法を検証したり¹⁰⁾、セルフモニタリングの実践効果を体調の変化から分析する研究が行われていた¹¹⁾。調査研究では、心不全患者に対して展開される教育プログラムの検討や^{12, 13)}、プログラムの成果である再入院率や費用対効果に関する調査¹⁴⁾、およびセルフモニタリングに関する患者教育の内容¹⁵⁾、効果¹⁶⁾、QOLアウトカム¹⁷⁾に関する調査が行われていた。また、病気の経験とそれに関連する知識についてのインタビュー調査も行われていた¹⁸⁾。

いずれの文献も、セルフモニタリングは心不全増悪の兆候を早期発見することに役立つものであり、患者が疾病を管理する上で不可欠な概念であるという視点

表1 心不全患者のセルフモニタリングに関する文献とセルフモニタリングの意味内容

著者/年	研究目的	対象	研究方法	セルフモニタリングの意味
1 Bennett S, et al. /2000 ¹⁰⁾	セルフモニタリングに関する指導後の効果と介入方法の検討	心不全患者 16名	10名の介入群と6名の非介入群の比較検討	日々の体重を測定し、浮腫の状況を見ること
2 Toman C, et al. /2001 ¹²⁾	心不全患者に対して開発された教育プログラムのガイドラインを調査、検討	心不全患者	様々な教育プログラムから望ましい教育プログラムを検討	心不全で経験する主な症状をみる
3 Schreurs K, et al. /2003 ¹³⁾	喘息、糖尿病、心不全の患者に対するセルフマネージメントプログラムの検討	喘息 83名、糖尿病 37名、心不全患者 22名	セルフマネージメントプログラムに対する患者、看護師による評価を分析	心不全の症状に早期に気づき、それらに対処できるようにすることで、毎日の体重を測り、体重、呼吸困難、下肢の浮腫や咳の増加を把握すること
4 Sethares K, et al. /2004 ⁹⁾	心不全患者に対する看護介入による再入院率およびQOL、健康観の効果を検証	心不全患者 70名	介入群 33名と非介入群 37名の再入院率、およびQOL、健康観を比較検討	水分過剰のサインに気づくこと
5 Tsuyuki R, et al. /2004 ⁴⁾	心不全患者に実践される2段階の疾病マネージメントプログラムの効果を検証	心不全患者 276名	プログラムの参加者 140名と非参加者 136名の再入院とその費用に関する比較検討	塩分や水分の蓄積、日々の体重、活動、随伴する症状を把握し、適切に内服し症状の悪化に気づけるようにすること
6 池亀 /2005 ⁸⁾	心疾患の再発を防ぐ患者指導の取り組みに関する総説	心疾患患者		患者が自分の病気や内服薬、自分の体調について知り、振り返ること
7 Lesperance M, et al. /2005 ¹⁵⁾	心不全患者のセルフモニタリングに関する退院指導の看護記録の内容を検証	心不全患者 23名	患者に提供されているセルフモニタリングに関する指導内容を分析	体重増加のサインをモニタリングすること
8 Smith C, et al. /2005 ¹⁶⁾	自己管理に関する指導後の患者の知識、セルフモニタリングの実践状況を調査	心不全患者 10名	患者指導後に、Heart Failure Knowledge Questionnaire等を用いて効果を分析	毎日の体重を測定し、服薬、減塩食に従い、水分貯留の状況を把握し、処方された運動を維持し、心不全の悪化の症状に気づけるようにすること
9 Eastwood C, et al. /2007 ¹¹⁾	セルフモニタリングの実践効果の検証	心不全患者 124名	セルフモニタリングの実践者 70名と非実践者 54名の体調変化の比較検討	体重、血圧、脈拍、倦怠感、呼吸のしづらさ、咳、むくみ、胸部症状を日々確認すること
10 仲村 /2008 ⁷⁾	心不全の急性期から回復・慢性期のセルフモニタリングに関する解説	心不全患者		自分で自身の状態をより客観的に評価し、治療に役立てること
11 Grady K, et al. /2008 ¹⁷⁾	心不全患者のセルフケアとQOLアウトカムに関する文献検討	心不全患者	セルフケアおよび関連概念について記述する文献におけるQOLアウトカムを抽出	バイタルサイン、体重、症状をモニタリングすること
12 Rodriguez K, et al. /2008 ¹⁸⁾	心不全の体験に基づく患者の知識を探究	心不全患者 25名	患者の病気経験及び知識に関するインタビュー調査	患者の健康を維持するために血圧、体重、水分の過剰さを確認記録すること

に立ち、論じていた。それに加え、Smithら¹⁶⁾は、毎日のセルフモニタリングがセルフマネージメントを高め、Lesperanceら²⁰⁾は、セルフモニタリングが患者の再入院の防止につながることを指摘し、セルフモニタリングにはQOLの改善を導く効果があることも論じられていた。

2. 心不全患者のセルフモニタリングの意味

心不全患者のセルフモニタリングという用語のもつ意味について、総説を除くすべての文献で、心不全で経験する症状やバイタルサインの変化を観察することとして捉えていた。それに加え、Schreursら²¹⁾は、単に症状を観察するだけでなく、心不全悪化の兆候に気

づくこともセルフモニタリングとしていた。また、池亀²²⁾は、患者が自分の病気や体調について知り、振り返ることとし、仲村²³⁾は、自身の状態を客観的に評価し、治療に役立てることとしていた。これらから、セルフモニタリングは、心不全増悪の兆候を早期発見したり、体調管理や治療を適切に継続するために、自ら心不全の状態を観察し、生じていることを把握するという意味合いで用いられる傾向にあることが示された。

セルフモニタリングすべき内容として各文献に示されていたのは、身体的な心不全症状の変化であった。その具体的内容は、浮腫、呼吸困難、咳嗽、倦怠感などの主観的な自覚症状を捉えることであったり、水分

や塩分の摂取状況、血圧、脈拍などのバイタルサインおよび体重の変化を客観的に捉えることであった。また、身体症状の変化のみならず、身体活動の状況や、内服・治療に対するアドヒアランスを挙げている文献もあった。

以上から、心不全患者がセルフモニタリングすべき観察内容は、身体症状の変化、身体活動の状況、および内服や治療に対するアドヒアランスであると考えられていることが示された。

3. 健康管理に関する概念

セルフモニタリングに類似する健康管理に関する概念で著名なものには、セルフケア、セルフマネジメント、アドヒアランス、コンプライアンスがある²⁴ (表2)。

1) セルフケア

セルフケア (Self-care) は、「自分自身の生命と健康な機能、持続的な個人的成長、および安寧を維持するために開始し、遂行する諸活動の実践」と Orem²⁵ により定義されている。これは、個人による個人のための活動であり、しかも専門家や一般の人々から得られる知識や技能を活用するが、専門家の助けに頼らない自立した活動として位置づけられている²⁶。従って、セルフケアとは個人が自立的、主体的に自らの健康管理を行うことを強調する概念と捉えられている^{27, 28}。心不全患者に焦点をあてたセルフケアについては、Grady²⁹ が、患者自身が日常生活で心不全に伴う様々な体調管理を行うための連続した諸活動であると述べている。

2) セルフマネジメント

セルフマネジメント (Self-management) は、「健

康を維持促進し、症状や病気の兆候をモニターしながら管理し、個人の機能や感情、対人関係に及ぶ病気の影響を調整しながら、治療や養生法を遵守すること」と Korff ら³⁰ により定義されている。この概念の特徴は、人間には、過去の経験に基づき、意識的、無意識的に経験を意味づけ、自己決定するという前提があり³¹、目的の実現に向けて資源や情報を自らコントロールする行為としてセルフマネジメントが行われる³²とされる点である。それらを踏まえ、Riegel ら³³ は、心不全患者に焦点を当てたセルフマネジメントについて、病気や疾患を管理したり、健康な習慣を通して健康を維持するプロセスを含むセルフケアの一要素であり、心不全の症状や兆候に対する反応としての認知的意思決定プロセスであると述べている。

3) コンプライアンスとアドヒアランス

コンプライアンス (Compliance) は、1970年代に注目された保健行動に関連した用語であり、Hynes ら³⁴ により医療者の処方、助言に対する、人の行動の一致の程度や能力を指すものと定義されている。しかし、この概念は、医療者と患者の関係を一方的な主従的關係として表し、患者の生活の個別性を排除し、指示を守るという健康管理の在り方をさしていると指摘され、コンプライアンスでは捉えきれない養生法実施における困難を生活者の視点で重視しようとする考えへの転換が進められた³⁵。そして、コンプライアンスに代わって用いられるようになったのがアドヒアランス (Adherence) であり、「自分自身を支えるために、責任をもってたゆまず努力すること」と Betschart³⁶ により定義されている³⁷。アドヒアランスは、医療者と患者のパートナーとしての関係を前提とし、療養の方法に関する意思決定も共同で行うという考えに基づく

表2 健康管理に関する概念とその定義

概念	定義
self-monitoring	自らの健康や病気を適切に管理するために、病気の症状や身体感覚を定期的に測定したり、記録したり、観察して認識すること (Wilde & Garvin, 2007 ⁴)
self-care	自分自身の生命と健康な機能、持続的な個人的成長、および安寧を維持するために開始し、遂行する諸活動の実践 (Orem, 2001 ²⁵) 患者自身が日常生活で心不全に伴う様々な体調管理を行うための連続した諸活動 (Grady, et al, 2008 ¹⁷)
self-management	健康を維持促進し、症状や病気の兆候をモニターしながら管理し、個人の機能や感情、対人関係に及ぶ病気の影響を調整しながら、治療や養生法を遵守すること (Korff, et al, 1997 ³⁰) 病気や疾患を管理したり、健康な習慣を通して健康を維持するプロセス (Riegel, et al 2000 ³³)
adherence	自分自身を支えるために、責任をもってたゆまず努力すること (Betschart, 1991 ³⁶)
compliance	医療者の処方、助言に対する、人の行動の一致の程度や能力を指すもの (Hynes, et al, 1979 ³⁴)

ものである³⁸⁾。コンプライアンスとアドヒアランスの特徴は、医療従事者との関係性を強調した概念であるという点で、他の健康管理の概念と区別されることが多い。

IV. 考 察

1. 心不全患者のセルフモニタリング

心不全の診断を受けた時から患者は病状に注意を払うよう指導され、日常生活において患者による健康管理が実践されていく。しかし、これまでそのような健康管理を「セルフモニタリング」と捉える動向は少なく、その定義が Wilde らにより示されるまで、曖昧な概念であった。それに加え、心不全患者のセルフモニタリングとは何を指すのか、明確に示されることはこれまでなかった。しかし、今回の文献レビューで心不全患者のセルフモニタリングとは、自らの心不全の状態を観察し、生じていることを把握することを意味していると解釈することができた。また、その具体的な観察内容としては、身体症状の変化、身体活動の状況、内服や治療に対するアドヒアランスが示唆された。特に身体症状の変化では、浮腫、呼吸困難、咳嗽、倦怠感という主観的な自覚症状や、体重、血圧、脈拍および、水分、塩分の摂取量という体調に関わる客観的指標を捉えることであるという示唆が得られた。それらは、心不全増悪の兆候を早期発見したり、体調管理や治療を適切に継続するために行われる行為であるといえる。

2. セルフモニタリングと類似する諸概念

セルフモニタリングという概念が看護の中で明確化されたのは最近のことであるが、その必要性和重要性は多くの医療者の知るところであり、慢性的経過をたどる患者に適応されている。なぜ、セルフモニタリングが実践されているにも関わらず、それ自体が注目されなかったのかという背景には、セルフケアやセルフマネジメントという類似した概念が、それを包括していたからであると考えられる。

健康管理の様相を示す概念の中で、最も著名なものにセルフケアがある。セルフケアは、Orem³⁹⁾が示しているように、自らの生命と健康および成長、安寧を維持することを目的とした人々の行為を指す。この特徴は、健康と病気のどちらの状態においてもなされる、当事者自身による認知と行動を含む広範囲な概念であるという点である。また、自分自身で意思決定

し、自ら行う行為であることから、医療従事者との関係性を強調したコンプライアンスやアドヒアランスとは異なる観点に立つものである。一方、セルフマネジメントは、健康や病気の状態を把握し、様々な影響を調整しながら治療や養生法を実践することであり、健康や病気の状態における生活管理に関する認知的意思決定のプロセスを強調する限定的な概念である。そのため、セルフマネジメントはセルフケアの一要素とされる⁴⁰⁾。その中でセルフモニタリングは、健康や病気を適切に管理するために、自らの状態を観察し、生じていることを把握することを指し、治療や養生法を実践するというセルフマネジメントに必要な認知的意思決定プロセスの一部と考えられる。「セルフマネジメントはより良いセルフモニタリングにより改善する」といわれているように⁴¹⁾、セルフモニタリングはセルフマネジメントに必要な一要素という位置づけとなる。

心不全患者が行う健康管理の到達点は、Grady⁴²⁾が提言した心不全患者のセルフケアである「患者自身が日常生活で心不全に伴う様々な体調管理を行うための連続した諸活動」を、適切に実践することである。しかし、その到達点にたどり着くためには、セルフケアに含まれる諸活動の一つずつセルフマネジメントするステップが存在すると予測される。セルフモニタリングは、そのセルフマネジメントのステップの中で生じていることを把握するという、はじめのステップに位置している。従って、セルフモニタリングは全ての健康管理の入り口として存在し、その後の健康管理の在り方を左右する重要な概念であるといえる。また、適切なセルフモニタリングの効果として、Smith⁴³⁾は、毎日のセルフモニタリングがセルフマネジメントを高めることを、Lesperance⁴⁴⁾は、セルフモニタリングが心不全患者の再入院の防止につながることを指摘した。これらは、セルフモニタリングはより良いセルフマネジメントおよびセルフケアを導くものであることを示している。そして、セルフモニタリングから始まる健康管理の最終的な目標は、心不全をコントロールしながら再入院することなく、患者自身の生活を営むことであることも示唆している。従って、セルフモニタリングは、心不全という慢性的経過をたどる疾患を持ちながらも、可能な範囲でQOLを維持改善し、その人らしい生活を患者にもたらす方策の一つであるといえる。以上の「セルフモニタリング」「セルフマネジメント」「セルフケア」の関係、およびそれらの概念と心不全発症からQOLの維持改

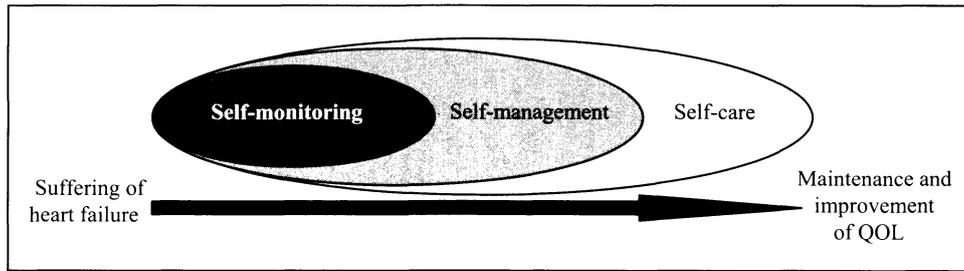


図1 心不全患者のセルフモニタリングと健康管理に関する諸概念との関係

善にいたる経過の関係を図式化した(図1)。

3. 心不全患者の療養生活支援とセルフモニタリング

心不全増悪時の症状は多岐にわたり、血圧や脈拍の変化という心臓自体の症状のみならず、息切れや咳嗽という呼吸器症状、尿量の減少や浮腫という腎症状、倦怠感という全身症状などが現れる。しかし、心不全の増悪で再入院した患者は、「咳が出るのは風邪だと思っていた」、「尿が出にくく、むくんでしまったのは老化のせいだ」、などと現れる症状の誤解を口にして、それらが心不全によるものだとは気づきにくい。あるいは、普段から息切れや倦怠感を伴う生活に慣れているため、増悪の兆候を見過しやすい。そして、生命の危機が迫ってから、あの症状が心不全増悪の予兆であったのか、と気づく場合も多い。その手立てとして、患者自身が病状増悪の早期発見、および体調管理や治療を適切に継続することを意図したセルフモニタリングを行うことは有用である。QOLの改善や、セルフケア、セルフマネジメントの実践を目指すとしても、そのはじめの一歩であるセルフモニタリングを適切に行えるようにしなければ、どのような健康管理も難しいと考えられる。従って、身体症状の変化、身体活動の状況、内服や治療に対するアドヒアランスを、患者自ら観察できるよう指導するとともに、外来でその実践状況をフォローアップし、心不全患者に必要なセルフモニタリングが適切に継続されるよう介入することが重要と考えられる。また、療養生活支援に携わる看護師が、今回明らかになった心不全患者に必要なセルフモニタリングについて共通認識を持ち、患者の健康管理能力を向上することを目指した援助を展開することも重要であると考えられる。

V. おわりに

心不全患者のセルフモニタリングは、心不全増悪の兆候を早期発見したり、体調管理や治療を適切に継続

するために、自ら心不全の状態を観察し、生じていることを把握することであることが示唆された。また、セルフモニタリングは、セルフマネジメントおよびセルフケアの一要素であり、QOLを改善し、その人らしい生活を患者にもたらす健康管理の入り口として存在していることが示唆された。

入退院を繰り返す心不全患者が増加している中、患者の療養生活支援に携わる看護師が、今回明らかになったセルフモニタリングについて共通認識を持ち、患者のセルフモニタリングを促進する援助を展開することが課題であると考えられた。

本研究は平成20、21年度文部科学省科学研究費、若手研究B(課題番号20791916)の助成による研究の一部である。

文 献

- 1) 厚生労働省(人口動態保健統計課): 心疾患脳血管疾患死亡統計の概況-人口動態統計特殊報告-. 平成18年3月9日報告書, 東京, 2006
- 2) 黒江ゆり子: 病のクロニシティ(慢性性)と生きることについての看護学的省察. 日本慢性看護学会誌 2007; 1(1), 3-9
- 3) 岩本隆茂, 坂野雄二, 大野裕: 認知行動療法の理論と実際. 培風館, 東京, 1997, p66
- 4) Wilde, MA, Garvin, S: A concept analysis of self-monitoring. *Journal of Advanced Nursing* 2007; 57(3), 339-350
- 5) 眞茅みゆき: 心不全のディジーズマネジメントの実践を探る-慢性心不全患者の重症化と合併症予防に向けた疾病管理プログラムの構築-. 看護技術 2008; 54(12), 88-92
- 6) 前掲書4)
- 7) 仲村直子: 急性期から始めるセルフモニタリングの教育. 看護技術 2008; 54(12), 70-73
- 8) 池亀俊美: ハートアタックの再発を防ぐための患者指導. *ハートナーシング* 2005; 18(12), 1252-1263
- 9) Sethares, KA, Elliott, K: The effect of a tailored message intervention on heart failure readmission rates, quality of life, and benefit and barrier beliefs in persons with heart failure. *Heart & Lung* 2004; 33(4), 249-260

- 10) Bennett, SJ, Hays, LM, Embree, JL, et al. : Heart messages – a tailored message intervention for improving heart failure outcomes – . *Journal of Cardiovascular Nursing* 2000 ; 14(4), 94–105
- 11) Eastwood, CA, Travis, L, Morgenstern, TT, et al. : Weight and symptom diary for self-monitoring in heart failure clinic patients. *Journal of Cardiovascular Nursing* 2007 ; 22(5), 382–389
- 12) Toman, C, Harrison, MB, Logan, J : Clinical practice guidelines – necessary but not sufficient for evidence-based patient education and counseling – . *Patient Education and Counseling* 2001 ; 42(3), 279–287
- 13) Schreurs, KM, Colland, VT, Kuijter, RG : Development, content, and process evaluation of a short self-management intervention in patients with chronic diseases requiring self-care behaviors. *Patient Education and Counseling* 2003 ; 51(2), 133–141
- 14) Tsuyuki, RT, Fradette, M, Johnson, JA, et al. : A multi-center disease management program for hospitalized patients with heart failure. *Journal of Cardiac Failure* 2004 ; 10(6), 473–480
- 15) Lesperance, ME, Bell, SE, Ervin, NE : Heart failure and weight gain monitoring. *Lippincott's Case Management* 2005 ; 10(6), 287–293
- 16) Smith, CE, Koehler, J, Moore, JM, et al. : Testing videotape education for heart failure. *Clinical Nursing Research* 2005 ; 14(2), 191–205
- 17) Grady, KL : Self-care and quality of life outcomes in heart failure patients. *J Cardiovasc Nurs* 2008 ; 23(3), 285–292
- 18) Rodriguez, KL, Appelt, CJ, Switzer, GE, et al. : They diagnosed bad heart – a qualitative exploration of patients' knowledge about and experiences with heart failure. *Heart & Lung* 2008 ; 37(4), 257–265
- 19) 前掲書 16)
- 20) 前掲書 15)
- 21) 前掲書 13)
- 22) 前掲書 8)
- 23) 前掲書 7)
- 24) 前掲書 4)
- 25) Orem, DE (訳：小野寺杜紀)：オレム看護論－看護実践における基本概念. 第4版, 医学書院, 東京, 2005, p 479 (2001年原本出版)
- 26) Levin, LS : Is self care a social movement, *Social Science Medicine* 1983 ; 17(18), 1343–1352
- 27) 旗持智恵子：心不全患者のセルフマネージメントの概念分析. 山梨県立看護大学短期大学部紀要 2003 ; 9(1), 103–113
- 28) 加賀谷聡子：虚血性心疾患患者のセルフマネージメントに関する文献レビュー. *日本循環器看護学会誌* 2006 ; 2(1), 66–71
- 29) 前掲書 17)
- 30) Knoff VM, Grumman J, Schadfer J, et. al : Collaborative management of chronic illness. *Ann Intern Med* 1997 ; 127(12), 1097–1102
- 31) 前掲書 27)
- 32) 前掲書 28)
- 33) Riegel, B, Carlson, B, Glaser, D : Development and testing of a clinical tool measuring self-management of heart failure. *Heart & Lung* 2000, 29(1), 4–15
- 34) Hynes, RB : Compliance in health care. The Johns Hopkins University Press ; Baltimore, 1979, p 2–3
- 35) 黒江ゆり子：病の慢性性 Chronicity と生活者という視点－コンプライアンスとアドヒアランスについて－. *看護研究* 2002 ; 35(4), 3–17
- 36) Betschat, J : Self-care – strategies for adherence. Rifkin, H, Colwell, J, & Taylor, S (ed), *Diabetes ; Elsevier Science*, 1991, 1175–1178
- 37) 前掲書 27)
- 38) 山西緑：心筋梗塞患者の運動療法へのアドヒアランスを測定する質問紙の開発－開発初期の段階－. *日本赤十字看護大学紀要* 2003 ; 17, 38–45
- 39) 前掲書 25)
- 40) 前掲書 27)
- 41) 前掲書 4)
- 42) 前掲書 17)
- 43) 前掲書 16)
- 44) 前掲書 15)